

上 林 貞 治 郎 著

資本主義企業の経営経済学

＜増 補 版＞

東 京 森 山 書 店 発 行

著 者 略 歴

1908年12月16日生れ（堺市）
1932年 3 月 大阪商科大学を卒業
1933年 3 月 大阪商科大学に勤務
1949年 4 月 大阪市立大学に勤務
1952年 3 月 経済学博士
1972年 3 月 大阪市立大学を定年退職
1974年 4 月 専修大学に勤務
1979年 3 月 専修大学を定年退職

著者との協定
により検印を
省略致します

資本主義企業の経営経済学（増補版）

1978年 4 月 3 日 初版発行

1979年 5 月10日 増補版発行

著 者 ©^{かん}上^{ばやし}林^{ていじろう} 貞治郎

発行者 菅 田 直 実

発行所 有限 森 山 書 店 〒101 東京都千代田区神田小川町
会社 1-3 小川町ビル

電話 東京 (03) 293-7061(代表) 振替口座 東京8-32919

落丁・乱丁本はお取りかえ致します 印刷・向上印刷 製本・永沢製本

は し が き

今年・1977年は、1917年11月のロシア社会主義革命の60周年にあたるが、この60年間の世界の歴史は、まさしく「疾風怒濤」の歴史であった。1917年11月から、世界は資本主義と社会主義という二つの社会体制に分裂した。そしてそれ以後の歴史は、一方では資本主義の全般的危機の進行の歴史であり、他方では社会主義の成長と発展の歴史であり、世界史的傾向としては資本主義から社会主義への移行の歴史である。このことは、とくに第2次大戦後に、社会主義世界体制が成立・発展して、現在、社会主義国がヨーロッパ、アジア、アメリカにわたって十数カ国に増加していることによって、いっそう明らかとなっている。日本でも、1945年8月の日本帝国主義の敗戦後、30余年間にわたる労働者・勤労者の運動の発展によって、1970年代からは、労働者・勤労者の未来を切り開く民主的転換の時期に入ったといわれている。これが世界と日本の今日の歴史的状況である。

このような世界史的状況の下で、世界資本主義の全般的危機の進行と世界社会主義＝社会主義世界体制の発展との下で、そして日本資本主義の政治的・経済的・文化的危機の深化の下で、わが国の労働者・勤労者の階級闘争の発展の中で文化闘争・理論闘争も発展してきた。そして、わが国の経済学全体の中においても、俗流的ブルジョア的潮流に対して、科学的マルクス主義的潮流が次第に力を強めてきた。このことは、経済学の中でも、まず政治経済学において、ついで部門経済学において、さらに経営経済学において、明らかに看取されるところである。近代経済学（「近経」）とマルクス経済学（「マル経」）という対照的呼称からも明らかのように、科学的マルクス主義的経済学は、わが国の経済学において既に確固たる地位を占めている。そして、この経済学の一分科としての経営経済学においても、今日、マルクス主義的な経営経済学は、既に確固たる地位を占めている。そしてわが国の科学的な経営経済学が今後さらに発展するためには、どのような方法と内容を発展させればよいのであるか、——これが今日の課題である。

この科学的経営経済学のいっそうの発展という今日の課題に応ずるために、私は、今までの諸著述の中から若干の部分を取り出して整理しつつ本書を書いた。最初のプランでは、『資本主義企業と社会主義企業』または『資本主義企業から社会主義企業へ』という書名での内容を予定していたが、執筆の頁数の制約と時間的制約とのために、この予定の前半にあたる「資本主義企業」の部分だけをまとめて、本書の内容としたのである。本書の各章の内容は、私が今までに、『経営経済学』（上林編・大月書店）、『経営経済学・企業理論』（上林著・大阪・所書店）、『マルクス経済学と近代経済学』（上林著・ミネルヴァ書房）、『現代産業論』（上林著・大阪・所書店）、諸論文などに執筆した原稿を整理し加筆して作成したものである。その内容は、経営経済学に関するものを中心としつつ、政治経済学に関するものを含み、さらに史的唯物論に関するものを含んでいる。本書の内容は、資本主義企業に関する諸問題にわたっているが、私の主眼点は、「弁証法的唯物論——史的唯物論——政治経済学——部門経済学——経営経済学」という理論的関連に基づいて、経営経済学的考察を発展させることである。一般に、哲学（弁証法的唯物論・史的唯物論）——経済学（政治経済学を中心とする各分科）——政治学（国家論・社会主義論を含めて）、という三つの科学は、密接に関連しており、このことは、「マルクス主義の三つの源泉または構成要素」ということからみても明らかである。この三つの科学の理論的関連を無視・軽視して、経営経済学だけを孤立的に研究しようとしては、誤りに陥るであろう。今日、日本の資本主義・企業は、資本主義の全航的危機の深化の下で、労働者・勤労者の力に基づく新しい転換、すなわち独占資本の支配を克服する民主的転換の局面に面している。このような時代的要請に応ずるために、経営経済学は、従来よりもいっそう政治経済学・部門経済学の科学的発展と結合し、また哲学、政治学との科学的関連を密接にして、その内容の科学的水準を向上させていかねばならない、——独善的な「経営学モンロー主義」を脱却して。

前述のように、世界史は、すでに1917年から、資本主義から社会主義への移行を歴史的傾向とする時代に入っている。このことは、第2次大戦後における社会主義世界体制の成立と発展によって一層明らかとなっている。さらに1960年代・

70年代に入ってから、世界の全社会主義的勢力——社会主義世界体制、社会主義を目指す全世界の労働者・勤労者、社会主義に到達するであろう民族解放闘争など——は帝国主義勢力よりも次第に優勢になっている。かように、資本主義から社会主義への移行を歴史的特徴とする現在の世界史においては、日本の資本主義・資本主義企業についても、静止的・固定的に考えるのではなく、変化的・発展的に考えつつ、考察を進めねばならない。すなわち、資本主義・企業の「過去→現在→将来」を歴史的に展望しつつ、現在の資本主義・企業の状態について考察することが必要である。それによって、現在は支配的・有力であっても将来は微力となり消失していく要因も、また現在は微弱であっても将来は強力となる要因も、すべてその変化・発展の法則的傾向性において正しく把握されうる。われわれは、資本主義から社会主義への移行という現在の世界史的発展傾向に基づき、日本資本主義の現在の民主的転換期に応じつつ、資本主義・資本主義企業の法則的变化発展に注意しながら、資本主義企業を考察せねばならない、——とくに、日本経済・企業の民主的改革・転換→さらに民主主義的変革→さらに社会主義的変革という発展方向に注意し、またその発展方向に促進的な諸要因の存在と発展に注意しつつ、考察を進めねばならない。

本書では、前述の事情のため、資本主義・資本主義企業と対照的な社会主義・社会主義企業については、第6第および第7章で少し考察するに留まったが、この問題については、『現代企業発展史論』（上林著・森山書店）、『ドイツ社会主義の成立過程』（上林著・ミネルヴァ書房）、『ドイツ社会主義の発展過程』（上林編・ミネルヴァ書房）、『社会主義の企業経営』（上林編・ダイヤモンド社）『経営経済学辞典』（上林等編・ミネルヴァ書房）などにおける社会主義・社会主義企業の所説を参照していただければ幸いである、——いづれ機会を得て、社会主義企業（主としてドイツ民主共和国における）に関する考察をまとめたと考えている。この社会主義企業の問題は、それと資本主義企業との比較のためのみならず——その比較によって資本主義企業の性質・内容を批判的に明らかにするためのみならず、——今日の日本の資本主義企業がいつかそれに到達するところの終着駅・目的地——しかしそこから日本の新しい発展が始まるところの——であるからであ

る。それゆえに、資本主義企業から社会主義企業への発展という観点・見透しをぬきにしては、今日の資本主義企業の考察は、歴史の発展方向から隔離された不毛な内容に終わるであろう。

私は、1932年に大阪商科大学を卒業し、翌33年に副手として研究生活に入ってから、すでに45年の年月を過ごしてきたが、今日、日暮れて道なお遠しという感じである。今後、残された余生において、出来るだけの研究努力をつくしたいと考えている。なお、私は、現在、若干の大学で、経営経済学・工業経済学・政治経済学の講義を担当していると共に、他方では、労働者教育協会・関西勤労者教育協会の講師として、労働者・勤労者に経済学関係の講述をおこなっており、さらに中小企業者・小零細業者の関係団体にも経済問題を話すことがある。私は、経営経済学が真に科学的社会主義の理論に基づくかぎり、一般の労働者・勤労者・小零細業者・中小企業者に実践的に役立つような科学的内容をもちねばならない、と思っている。一言でいえば、労働者階級の階級闘争、現在の日本ではその民族的民主的変革の闘争、に役立つような科学的社会主義的立場での経営経済学に努力したいと思っている。この問題でも、同じ志の同学諸氏との協力によって前進したいと考えている。

1977年12月16日

上 林 貞 治 郎

増補版はしがき

1978年の1年間において、「経済民主主義」の問題が急速に前面に出てきた。そこで、私は、補章「経営経済学と経済民主主義」を書いて、この「増補版」を出すこととした。

1979年4月3日

上 林 貞 治 郎

目 次

序 章 資本主義企業・工場——資本家と労働者	1
I 今日の資本主義企業・工場とその研究の状況について(1)	
II 資本主義企業・工場を考察する視角について(3)	
III 歴史・社会の主体としての労働者階級について(5)	
IV 資本主義生産・工場と労働者について(6)	
V むすび 生産力と生産関係との統一と闘争について(8)	
第1章 資本主義生産の理論	9
1 生産・労働.....	9
I 人間の生産・労働について(9)	
II 人間における労働の役割について(11)	
III 労働過程の三要因について(12)	
2 商品生産	15
I 商品——使用価値と価値(交換価値)について(15)	
II 商品生産および社会的分業について(17)	
3 資本主義生産	19
I 資本主義的商品生産について(19)	
II 資本主義社会における諸行為の総結果、その偶然性と必然的法則性について(21)	
III 個々の意志・動機と窮極の原動力・原因について(23)	
IV 商品生産の無政府性と経済法則の支配について(25)	
V 若干の補足的説明について(28)	
VI むすび 経営学者の「ロビンソン物語り」(31)	
第2章 資本主義企業の理論	33
1 資本主義の経済法則	33
I 資本主義企業と資本主義の経済法則との関連について(33)	

Ⅱ 社会発展の一般法則について(34)	Ⅲ 資本主義の経済法則・経済的運動法則について(36)	
2	資本および剰余価値	38
Ⅰ 資本——自己を増殖する価値について(38)	Ⅱ 資本の内容と成立について(40)	Ⅲ 資本と賃労働との関係——剰余価値の取得について(41)
3	資本家と経済法則	42
Ⅰ 資本家——資本の人格化について(42)	Ⅱ 資本家(その意志・行為)と経済法則について(43)	
4	個別資本と社会的総資本	48
Ⅰ 俗流的経営学の思考について(48)	Ⅱ 利潤について——俗流的思考と科学的思考(49)	Ⅲ 個別資本と社会的総資本について(51)
	Ⅳ 社会的総資本の一部分としての個別資本について(53)	Ⅴ 社会的総資本の拡大再生産の観点について(55)

第3章 独占的大企業の理論 59

1	資本主義の独占段階とその理論	59
Ⅰ 資本主義の独占段階と独占的大企業(独占企業)について(59)	Ⅱ 俗流的理論における独占的大企業・独占資本主義の把握について(61)	
2	資本主義の全般的危機とその理論	62
Ⅰ 資本主義の全般的危機(第一段階)の特徴について(62)	Ⅱ 俗流的理論における資本主義の全般的危機の把握について(64)	Ⅲ 資本主義の全般的危機の第二段階について(65)
	Ⅳ 資本主義の全般的危機の深化過程・新局面(66)	Ⅴ 俗流的理論における全般的危機の第二段階・新局面の把握について(67)
	Ⅵ 独占資本主義・独占的大企業についての俗流的理論における最近の主要特徴について(69)	

3	二つの経営経済学	72
	Ⅰ 俗流的経営学の諸傾向について(72) Ⅱ マルクスの経営経済学について(74) Ⅲ 経済学の三分科・その一分科としての経営経済学について(75) Ⅳ 科学としての経営経済学(76)	
4	ブルジョアの経済学とブルジョアの経営学	78
	Ⅰ ブルジョアの経営学における経済学と経営学の分離・対立の主張について(78) Ⅱ 政治経済学と経営経済学との客観的関連(ブルジョア経済学における)について(79)	
5	ブルジョアの経済学における独占理論	81
	Ⅰ 主観的構成論, 主観的観念論としての特徴について(81) Ⅱ 独占と競争について(83) Ⅲ 不完全競争・独占的競争の理論について(85) Ⅳ 独占資本および独占段階の解消理論について(87) Ⅴ 国家独占資本主義の正当化について(90)	
第4章 資本主義企業の発展		93
1	資本主義生産・資本主義企業	93
	Ⅰ 商品生産について(93) Ⅱ 資本について(96) Ⅲ 資本主義生産について(97) Ⅳ 剰余価値の生産について(98) Ⅴ 資本主義生産(相対的剰余価値の生産)の三基本形態=基本段階について(99)	
2	賃労働・賃金労働者	101
	Ⅰ 賃労働について(101) Ⅱ 賃金について(102) Ⅲ 労働管理・生産管理について(103) Ⅳ 労働・労働者について(103)	
3	資本主義的蓄積	105
	Ⅰ 資本の蓄積について(105) Ⅱ 資本主義的私的取得と社会的生産——資本主義生産の基本矛盾について(106) Ⅲ 資本の所有と機能——資本と経営について(107) Ⅳ 商業資本と商業労働について(108)	

4	独占・独占資本主義	109
	I 独占資本主義の主要特徴について(109) II 独占資本・ 独占について(112)	
5	独占的大企業の特徴	114
	I 独占的大企業について(114) II 独占的大企業の管理と 生産について(115)	
6	企業集中形態・独占形態	116
	I 資本の蓄積, 集積, 集中, 独占について(116) II 国際 的資本集中(国際カルテル, 国際トラスト, 国際コンツェルン) について(118)	
7	資本主義の全般的危機(第一段階)における企業.....	119
	I 資本主義の全般的危機(第1段階)の主要特徴について (119) II 第1次世界大戦後の相対的安定期における企業に ついて(121) III 世界経済恐慌(1929年よりの)以後における 企業について(123) IV 大企業の管理構造の問題について (125)	
8	資本主義の全般的危機の第2段階以後における企業	126
	I 資本主義の全般的危機の第2段階および深化過程(新局面) について(126) II 新技術・新産業の発展について(127) III 経済的企業的諸変化のブルジョア的理論について(128) IV 資本主義の全般的危機の第2段階以後における生産および 企業について(129) V 1970年代における企業(主として日 本)について(135)	
第5章 中小零細企業——中小零細企業の問題と『資本論』.....		143
1	中小企業・零細業者の問題と『資本論』	143
2	本源的蓄積と単純商品生産者の収奪との問題	145
	I 資本の本源的蓄積(145) II 本源的蓄積の歴史的傾向 (146)	

- 3 単純商品生産者の産業資本家への転化とこの二つの区別 148
 - I 貨幣の資本への転化(148) II 資本主義的生産様式への移行過程(149)
- 4 大資本による中小資本(および単純商品生産者)の収奪 151
 - I 価値法則に基づく特別剰余価値の取得(および中小企業者の駆逐)(151) II 資本の集中の法則に基づく大資本による中小資本の収奪(154)
- 5 「収奪者の収奪」——資本主義的生産様式の止揚..... 156
 - I 「収奪者の収奪」(156) II 「否定の否定」としての社会主義的共有(157)
- 6 小零細業者・中小企業者に関連するマルクスの考え 158
 - I 手工業者・小工業者・小商人の行方(158) II 小生産者・小商人の進むべき道(160) III 中小資本家の問題(161)
 - IV むすび 1970年代以後の中小企業・零細業者の問題(162)

第6章 資本主義企業と社会主義企業 165

- 1 資本主義企業と社会主義企業..... 165
 - I 資本主義企業の成立・発展過程について(165) II 社会主義企業の成立・発展過程について(166) III 資本主義および社会主義の諸経済法則について(168) IV 資本主義社会と社会主義社会について(169)
- 2 社会主義企業の成立の経路と形態..... 170
 - I ソビエト連邦における社会主義企業の成立過程について(170) II 中華人民共和国における社会主義企業の成立過程について(171) III ドイツ民主共和国における社会主義企業の成立過程について(173) IV 社会主義企業の成立の諸経路について(173) V 社会主義革命の経過と社会主義企業の成立過程について(175)
- 3 ドイツ民主共和国における社会主義企業の成立過程 176

- Ⅰ 東ドイツ地域における人民民主主義革命について(176)
- Ⅱ 労働者統制の発展, 経営協議会の発展について(177)
- Ⅲ 独占資本・戦犯資本の没収と人民所有経営の成立と発展について(177)
- Ⅳ 手工業生産協同組合と農業生産協同組合について(178)
- Ⅴ 資本主義的中小企業の社会主義的改造について(179)
- Ⅵ ソビエト株式会社と人民所有経営への転化について(180)
- Ⅶ むすび 共産主義の初期の段階としての社会主義における過渡的現象について(181)

第7章 資本主義の発展と社会主義への転化 183

- 1 社会の生産力と生産関係 185
 - Ⅰ 社会の発展法則について(185)
 - Ⅱ 若干の補足的説明について(186)
 - Ⅲ 生産力の決定的意義について(187)
 - Ⅳ 生産用具=労働手段の重要性について(189)
- 2 動物から人間への進化と, 原始共同社会から階級社会への発展 192
 - Ⅰ 猿・動物から人間への進化——労働の役割について(192)
 - Ⅱ 原始共同社会=無階級的社会から階級社会への発展について(195)
 - Ⅲ 共同社会と商品生産社会との区別について(199)
- 3 資本主義の生産力と生産関係——階級闘争の発展と役割について 203
 - Ⅰ 階級闘争の歴史とその経済的基礎について(203)
 - Ⅱ 階級闘争と歴史の運動法則について(204)
 - Ⅲ 階級闘争の発展と階級社会の消滅過程について(205)
- 4 生産力の発展と資本主義的生産関係の桎梏化 207
 - Ⅰ 資本主義における生産力の発展と生産関係の桎梏化について(207)
 - Ⅱ 資本主義における「生産力と生産関係との矛盾」の内容について(209)
- 5 資本主義の基本矛盾の解決 213

- I プロレタリアートの歴史的使命について(214) II プロ
レタリアートの状態について(216) III 資本主義の基本矛盾
の解決について(221) IV 新しい共同社会への移行について
(225) むすび(228)

結 章 科学的社会主義と経営経済学..... 231

- 1 科学的経営経済学の成立・発展..... 232
 - I 経営経済学の成立・発展(232) II 科学的(マルクスの)
経営経済学の成立について(234) III 第2次大戦後における
科学的経営経済学の発展について(235)
- 2 経営経済学の方法論争と学問的性格 238
 - I 初期の経営経済学の方法論争について(238) II 経営経
済学における「理論と実践との統一」について(240) III 俗
流的な資本家の経営学の理論的特徴について(241)
- 3 経営経済学の政策的課題 246
 - I 俗流的な資本家の経営学の政策的課題について(246)
 - II 科学的経営経済学の政策的課題について(248)
- 4 経営経済学と弁証法的唯物論 252
 - I 経営経済学における弁証法的把握について(252) II 経
営経済学における唯物論的把握について(256)
- 5 むすび 科学的経営経済学の思想的課題 262
 - I 「働く国民のための経営経済学」について(262) II 左
右の日和見主義的思想の克服について(264) III 実証的諸研
究の吸収と理論闘争の課題について(266)

補 章 経営経済学と経済民主主義 269

- 1 経営経済学と経済民主主義 269
 - I 経営経済学の経済民主主義的課題について(269) II 経

	営経済学と国民生活(272)	Ⅲ 働く国民のための経営経済学 (275)	
2	経営経済学における理論・歴史・政策		277
	Ⅰ 経営経済学における理論・歴史・政策について(277)	Ⅱ 経営経済学の今日 的方向(279)	Ⅲ 史的唯物論・経済学・社 会主義論(282)
3	経営経済学の発展と今日的課題		283
	Ⅰ 経営経済学の発展について(283)	Ⅱ 経営経済学の今日 的課題について一若干の具体的説明(285)	Ⅲ 経営経済学の 「創造的発展」—「因われた経営経済学」から「解放された経 営経済学」へ(291)

序章 資本主義企業・工場——資本家と労働者

I 今日の資本主義企業・工場とその研究の状況について

今日、資本主義そのもの、全体としての資本主義生産、各産業部門の生産、その中の各資本主義企業の生産、——これらすべては、資本主義の全般的危機の進行の下で、いろいろな矛盾を深めており、そのために労働者、勤労者、中小零細企業の状態は、悪化傾向をたどっている。このことは、世界資本主義の一般的特徴であるが、とくに今日の日本では、高物価とインフレーションの下での深刻な不況の長引き、独占的大企業に圧迫される多数の中小企業の苦況・倒産、小零細業者の半プロレタリア化、労働者・勤労者の実質賃金・実質所得の減少と貧困化、諸公害による住民の生活条件の破壊によって、一層強められている。このような世界経済・国民経済の状況の下で、日本の独占的大企業は、その独占の高利潤を追求しつづけ、そのために国家独占資本主義的メカニズムを利用し、その中で多くの経済的政治的腐敗・汚職を悪用し、労働者に対する搾取を強め、農民・小商工業者の収奪を激しくし、諸公害を拡散しつつ、資本の蓄積・集積を強行し、資本の集中・独占を強化している。かような状況の下で、日本の商工業従業者の約七五％が働いている中小零細企業の状態は急速に一段と悪化し、中小企業の倒産、その労働者の失業、小零細業者の廃業・転業、これらの労働者・勤労者の貧困化の進行という状況は、誰の目にも明らかである。

今日、われわれが資本主義企業・工場の問題を考察しようとする場合、以上のような状況、つまり資本主義企業全体の状況、すなわち独占的大企業だけではなく多数の中小企業・小零細業者の状況、また会社・資本家・経営者の状況だけではなく幾千万の労働者・勤労者の状況——これらすべての状況を総括しながら、その中のそれぞれの問題を考察せねばならない。ところが、今まで、資本主義企業・工場の経済学的研究の状況とくに経営経済学での研究の状況は、どうであったか。ある人は、経営経済学の研究対象は独占的大企業であると独断的に決め

て、多数の中小零細企業を無視している。ある人は、独占的大企業の管理問題・管理論について何冊かの本を書いている、——資本家の「金儲け」のための管理論が「科学」たりうるかどうかという反省もなしに。ある人は、世界企業・多国籍企業の国際活動について、近世初めの新大陸・新航路の発見のような讚美論的説明を述べている。ある人は、経営学は企業の内部構造を見なければならないとして、資本家・経営者がつくりあげた経営組織・管理組織について門外者の讃辭を呈している。ある人は、人間関係論・経営社会学・経営心理学的な労務管理を、人間性の回復や人間疎外の克服の新しい労務管理として美化している。ある人は、コンピュータやオートメーションやコンビナートによって、独占的大企業の工場・職場も天国・楽園になるかのように説教している。ある人は、経営計画や管理会計によって、企業の大量生産や大量販売もきわめて計画的に遂行されてゆくかのように説明している。——しかしながら、もしそうであるならば、初めに述べたような危機的状況は起らないはずである。

今日、われわれは、資本家・経営者に「曲学阿世」や「産学協同」をするのではなく、また俗流的経営学ブームに便乗するのではなく、また素人的な管理論的知識をひろうするのではなく、またジャーナリズム・学界に売りだそうとするのではなく、——そうではなくて、今日の日本の国民経済、各産業部門、大中小の多数の企業・工場、それらの中で働いて生活している幾千万の労働者・勤労者の労働と生活、その家族の状況をつねに念頭におきながら、企業・工場内外の現実を客観的に描き出し、その苦況の原因を分析し、経営・労働・生活の改善の方向を探索せねばならない。このことを忘れ、また、このようなことは初めから考えず、ただ、大企業、資本家・経営者の存在とそれへの奉仕だけが頭の中にある学者・研究者も、少なくない。今日、幾十万・幾百万人の学生・生徒は、現在の国家独占資本主義のつづくかぎり、一生涯にわたって労働者・勤労者・俸給生活者の状況にあるのであり、したがって資本家・経営者によって管理される状況におかれているのであるが、多くの先生がたは、それら学生・生徒に向って、管理する立場からの経営管理論、労務管理論、生産管理論、販売管理論を教えている、——つまり、一生を通じて管理され搾取される人達に、管理し搾取する方法を教